慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Ibn Fadlanのヴォルガ・ブルガール旅行記について
Sub Title	On the Risalat of Ibn Fadlan
Author	家島, 彦一(Yajima, Hikoichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.331(493)- 350(512)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0335

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Ibn Faḍlān のヴォルガ・ブルガール旅行記について

家島彦一

ここに言うヴォルガ・ブルガールは、七世紀の後半、東方からの新勢力 al-Khazar の侵入によって、黒海北岸のアゾフ海周辺にあつた大ブルガールが瓦解したのち、その一派でヴォルガ・カマの河間地帯に移動したブルガール、すなわちイスラーム史料中に見る Bulghār、もしくは Bulkār のことである。(1) 中世イスラームの地理学者達は、このブルガールを指して al-Ṣaqālibat (Ṣiqrāb) とも言つており、両名称を厳密には区別して用いなかつた。一般に、al-Ṣaqālibat は、ヨーロッパ東北部在住のフィン、ブルガール、ブルタース (Burṭās)、トルコなど諸部族の総称と考えられていたと思われる。

1

中世イスラーム地理書の中には、歴史研究、とくに商業及び交通史に関連した興味深い史料を含むものが少なくない。しかし、それらを厳密な史書と同様に利用するには、地理書が持つ独自な性格に充分な考慮が払われる必要があろう。

地理書の内容のかなりの部分が過去の書から無批判に、あたかも当代の知識の如くに引用・踏襲されていることも、その顕著な性格の一つと考えられる。そこでイスラーム地理書の利用およびその研究にあたつては、各地理書の系統関係の

究明とテキスト批判とを通じて本源の知識に近づくことが必要となる。(2)

十世紀初頃、アッバース朝の第十八代カリフ・ムクタディル al-Muqtadir bi'llāh (A. D. 908～932) が派遣した使節の一員として、ヴォルガ・ブルガールに旅行したイブン・ファドラーン Aḥmad b. Faḍlān b. al-'Abbās b. Rāshid b. Ḥammād は、帰国後にその報告書「リサーラ Risālat」を著わした。(3) この書は、後代の多くの地理学者達、例えば Iṣṭakhrī, Ibn Ḥawqal, al-Marwazī, Yāqūt, al-Qazwīnī などによって、しばしば引用されており、言わば広く北方地域の地理的知識を提供したと言えるのである。したがって「Risālat」は、十世紀初めの旅行記としての価値は勿論のこと、イスラーム地理学研究の上で一つの重要な根本史料と考えることが出来る。

筆者は、とくにその後者に対する関心から、試みに「Risālat」をアラビア語から翻訳した。本稿は、その翻訳作業中に気付いた問題点に若干の私見を加えて、「Risālat」の概要を紹介するものである。

2

一九二二年に Zeki Validi Togan は、イランの Mashhad (Nīshāpūr の東) にある Imām 'Alī al-Riḍā 聖廟付属の図書館に於て、三種類のイスラーム地理書——㈠ Ibn al-Faqīh「Kitāb al-Buldān」の一部、㈡ Abū Dulaf al-Muhalhil「al-Risālat al-'Ukhrā」、㈢ Ibn Faḍlān「Risālat」——が合本された一写本（所謂 Mashhad 写本）を発見した。(4)

その中の一つ Ibn Faḍlān の「Risālat」は、ところどころ逸脱・磨滅している上に、後半部分、つまり al-Khazar に関する記載が中途で切れた不完全なものではあるが、現存する唯一の写本であって、その文献的重要性については、改めて強調するまでもない。(5) 従来、Ibn Faḍlān の書は、Yāqūt の地理辞典「Mu'jam al-Buldān」の中の "Itil",

"Bāshghird", "Bulghār", "al-Khazar", "Khwārazm", "Rūs" の各項目および al-Qazwīnī の書「Āthār al-Bilād w' Akhbār al-'Ibād」[6] に断片的に引用された記事を蒐集・彙録しての言わば間接的な利用にとどまつていた。M. Frähn による「Ibn-Foszlan's und anderer Araber Berichte über die Russen älterer Zeit」(St-Péter., 1823) は、それらの引用文を求めて、訳出・註釈したものである。[7]

一九三九年になつて、Mashhad 写本によつた Ibn Faḍlān の最初の訳註書がその発見者 Z. V. Togan と И, Ю Крачковский (実際の仕事は、А. П. Ковалевский) の両学者によつて、別々に発表された。

。Z. V. Togan「Ibn Faḍlān's Reisebericht」(*Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes*, vol. 24, Leipzig, 1939)

。И. Ю. Крачковский「Путешествие Ибн-Фадлана на Волгу」(Москва, 1939)

この両書は、凡そ関連する限りのあらゆる問題、例えば「Risālat」と他のイスラーム地理書との関連、当時のバグダード・カリフとブルガールとの間の政治・経済関係や使節派遣の経緯、とくに V. Togan のものは、Mashhad 写本の中の不鮮明な箇所を Yāqūt, Aḥmad Ṭūsī, Amīn Rāzī などによる引用文と対比・傍証することによつて、修復に努め、また関連事項の歴史、部族、言語を詳細に論究した雄篇であつて、いわば「Risālat」の基礎的、綜合的な研究書と言うことが出来る。従つて、それ以後の研究は、いずれも両学者の業績に基礎をおき、その細部批判や補助的な問題点の解明にとどまつている。例えば次に掲げる論文は、その主要なものである。

。H. Ritter: Zum Text von Ibn Faḍlan's Reisebericht. *ZDMG.*, 1942, 98～126.

。D. M. Dunlop: Zeki Validi's Ibn Faḍlan. *Die Welt des Orients*, 1949, 307～316.

。R. P. Blake & R. N. Frye: Notes on the Risalat of Ibn Fadlan. *Byzantina-Metabyzantina*, 1949, 7～37.

。K. Czeglédy: Zur Meschheder Handschrift von Ibn Faḍlan's Reisebericht. *Acta Orientalia Hung.*, 1. fasc. 2～3, Buda., 1952, 217～242.

一九五六年に、A. П. Ковалевский は、一九三九年に出版のものを基礎に、上述の諸論文を再検討し、またヴォルガ・カマ流域での遺物・遺跡の考古学的な調査結果をも綜合・分析して、「Книга Ахмеда Ибн-Фадлана о его путешествии на Волгу в 921～922 гг.」を完成した。また M. Canard によって仏訳校註「Le relation du voyage d'Ibn Fadlân chez les Bulgares de la Volga」(*AIED*, XVI, Alger 1958, 41～146) も試みられた。(8)

以上の如く、諸学者による研究を通じて、イスラームの歴史・地理研究の上で占める「Risālat」の特異な価値が認識されていつたのである。

なお、筆者の使用したテキストは、Mashhad 写本の写真版（Czeglédy 及び Ковалевский 本の巻末附）を基底とし（本文中の f。は、その写本頁）、さらに V. Togan, Sāmī al-Daḥḥān(9) などによる校訂本を参考にした。

3

Ibn Faḍlān の「Risālat」は、その記載内容から見て、㈠ 旅行の発端、イスラーム圏内旅行（Baghdād～Bukharā, Khwārazm）㈡ トルコ族居住地（al-Ghuzz, al-Bajanāk, al-Bāshghird）㈢ ヴォルガ・ブルガール国 ㈣ al-Rūs ㈤ al-Khazar の五つの部分に大別することが出来る。

㈠ 旅行の発端、イスラーム圏内旅行

ヒジュラ暦三〇九年（九二一年）に、ヴォルガ・ブルガール国（al-Ṣaqālibat）の Almish b. Yalṭwār なる王から、時のバクダード・カリフ al-Muqtadir bi'llāh のもとに次のような内容の手紙がとどいた。

"(al-Ṣaqālibat) 王のところに誰か（イスラーム）信仰について教授し、イスラーム法を解説し、王のためにマスジドを建立した上、自国内ならびに王の全（属）国において、カリフの御名のもとにフトゥバ（al-da'wat）が行われるようにミンバール（説教壇）を設けてくれる人を派遣されることを、加えては、王に敵対する諸王候（mulūk）から自らを防衛する（ための）城塞を構築して下されるように（f° 197a)。"

この文面から判断すると、イスラーム教の弘布、マスジド、ミンバールの建設などイスラーム教への全面信奉を通じてバグダード・カリフの政治・経済的な援助を獲得し、国家の安寧と繁栄をはかろうとしたヴォルガ・ブルガール王の強い政治的意図が感ぜられる。同様の事実は、Ibn Faḍlān が実際にブルガール王と会見した際に、王自身の口から明瞭に語られている。即ちブルガールは、その宗主国 al-Khazar のために王の息子と娘を人質として奪われ、しかも毎年ブルガール人民の戸数に相当する黒貂の皮が貢租として課せられている、この長年にわたるブルガールの従属的な立場を一掃して、武力をもつて積極的に対抗するためには、カリフの援助による城塞の構築やその他の経済的な援助が是非とも必要である、と。(10)

七世紀末以来つづいた al-Khazar によるブルガール支配は、当然彼らブルガールの政治、経済、社会などあらゆる面で al-Khazar の影響を受けたものと考えられる。Ibn Faḍlān の記しているブルガール王名 Yalṭwār (ältebar)(11)、四王候制度、あるいは死者に対する埋葬の形態などがトルコや蒙古の様式と共通していることは、明らかに al-Khazar を通じての影響であろう。しかし九世紀末から十世紀の初頃にかけての al-Khazar 勢力の衰退、即ち al-Ghuzz, al-Bāshghird や al-Bajanāk の西進、北方からはヴォルガ河を下つて再度侵入をつづける al-Rūs の脅威は、al-Khazar 国に決定的な打撃を与えた。(12) このように、とくに十世紀に入つてからの al-Khazar 勢力の弱体化がその隷属国ブルガールをして積極的な自立政策へ転化せしめたのであつて、ブルガール王がバグダード・カリフに接近して、その直接援助を要求するに

いたつた事情もその反映と考えることが出来る。

一方、カリフ側がこの申出を受諾した理由について V. Togan は、地方政権やトルコ勢力の抬頭、とくにカルマットの反乱、Ṭabaristān におけるアリー派の陰謀など後退期を迎えた当時のカリフ政権は東北の情勢に多大の関心を持つていたこと、またカスピ海の岸辺の大勢力 al-Khazar を抑えるためにも北方の新勢力ブルガールの成長をむしろ歓迎したためである、などの点を、A. П. Ковалевский は、むしろその商業的、宗教的な面を重視している。[13] しかし、時のカリフは、この使節の派遣を両学者が説明した程に重大な関心をもつて実行したかは疑問である。否、むしろブルガール書簡の上奏者 Nadhīr al-Ḥarami とブルガール王との間の個人的な利害関係によつた点が大きかつたと考えるべきであろう。先に掲げた書簡の到着以前から Nadhīr とブルガール王との間に何らかの交流があつたことは、王が Nadhīr 宛ての書簡で薬物を依頼したことから推察することが出来（f° 197a）、また使節の代表者は、Nadhīr のマウラー（被保護者）の一人 Sūsan al-Rassī であつて、その他使節派遣の準備がすべて Nadhīr を中心にして積極的に進められたという諸事実が、これを裏書している（f° 197a）。

いずれにしてもカリフは、ブルガール王の要請を受諾し、カリフ書簡の代読、ファキーフやムアッリム達の身柄保護および下賜品の贈呈などの任が Ibn Faḍlān に委託された。[14] なお、使節の代表者は、前述した通り Nadhīr のマウラー Sūsan al-Rassī であつて、それにトルコ人の Takīn（Tegin）、ブルガール人 Bāris、数人のムアッリムとファキーフ達が随伴した。おそらく総勢十名にも満たない使者の派遣であつたと思われる。

ヒジュラ暦三〇九年、Ṣafar 月十一日（九二一年六月二一日）に、平安の都バグダードを出発。中央アジアに到るアッバース朝の東幹道の一つホラーサーン街道を通つて、時のサーマン朝の都 Bukhārā に向つた。ここで興味ある点は、使節一行がバグダードを離れるにつれて、カリフの中央統治権が徐々に後退し、代つて地方政権の支配力が優位を占めて

いく過程がその記載から窺知出来ることである。当時の Nīshāpūr は、アリー派の支配下にあつたため、使節一行は、キャラバン隊の中に身を隠して、難を避けつつ進み、またサーマン朝のエミール Naṣr b. Aḥmad や Khwārazm-shāh が使節に対して見せた態度、表面上はカリフに忠節な態度をとりながらも暗に使節の通過を阻止して、カリフの命による資金の調達を拒否した等の中にも、端的にあらわれている。[15] 使節一行がトルコに向けて出発する際に、Khwārazm-shāh は、

〃汝ら（使節一行）にこの（トルコ国に入る）ことを許可するわけにはゆかぬ。みすみす汝らの生命を危険にさらして置くことは、私としても許せないからだ。ところで、このこと（即ち使節がブルガールに派遣されるにいたつたこと）は、例の下僕、つまり Tegin が仕組んだ計りごとであろうことは、私も既に感付いている。なぜならば、その男は嘗ては、われわれのところで鍛冶屋をしていたし、あの異教徒の国で鉄の売買をしていたことがあるからだ。だから、Nadhīr をだまして敬虔の君主（カリフ）に進言せしめ、君主のところに al-Ṣaqālibat 王の手紙を手渡させるようにと仕組んだのも彼（Tegin）にほかならない。偉大なるエミール、即ち Khurāsān のエミールこそ、もし彼がこと有益であると認めた際には、この国において、敬虔の君主のためのフトウバを行うに最もふさわしい（方）なのだ。[16] それに加えて、汝らと汝らも承知のあの国の間には、千の異教の民（alf qabīlat min al-kuffār）が居る。よつて、このことはスルタンを欺かんとするものである。私は汝らに忠告する。ひとまず偉大なるエミールに書状を送付する必要があろう。そうすれば、彼が（さらに）スルタン――アッラーよ、彼にお力添えを――に文書でお伺いをたてるであろうから。汝らとしては、その返答がくるまでは、そのまま留つているがいい（f° 198a）。〃

と語つた。その言葉の中には、当時の Khwārazm 国とサーマン朝との間の緊密な関係、バグダード・カリフとブルガールとの直接交渉を嫌忌した態度が窺われる。

(二) トルコ族居住地

Jayḥūn（アム）河の氷がゆるむのを待つて、三〇九年 Dhu'l-qa'dat 月の二日(九二二年三月四日）に、イスラーム圏内にある最後の地 Jurjāniyat を出発。Bāb al-Turk を通過して、〝山一つなき荒野（barrīyat qafr）の中を人一人として出合うことなく〟十五日の間、厳寒と疲労に悩まされながら踏破していつた（f°. 199b)。恐らくカスピ海とアラル海との中間に横たわる平原を真直ぐに北上していつたものと思われる。

Ibn Faḍlān は、トルコ国に関して、使節一行が出合つた al-Ghuzz, al-Bāshghird, al-Bajanāk など遊牧トルコ族の社会・文化の諸様相について、断片的ではあるが、かなり興味深い事実を報告している。使節一行は、Üst-yurt の山陵地帯を通過後に、まず al-Ghuzz の一集団を見た。彼らは十世紀の初頃にはカスピ海の東南部 Jurjān からシル河に及ぶ広大な領域を占め、さらに西側は al-Khazar、北は al-Bāshghird やブルガールとも境を接していた。しかも彼らは既に隣族の al-Bāshghird や al-Bajanāk よりもかなり進んだ国家を形成しており、政治形態についても Yabghū, Kūdhirkīn, Turkān, Yanāl, Baghlīz (Iylghiz) などの称号をおびた各種の君長が存在し、重要案件は、彼らの協議によつて決定されていたと思われる。

なお Ibn Faḍlān が述べているように、al-Ghuzz とブルガールの両国は、ともに al-Khazar とは敵対関係にあつたために、両国間には政治的、軍事的な面で密接な結びつきがあつた。[17] al-Ghuzz の軍指揮官 Atrak がブルガール国に婿を送つていることもその一つのあらわれであろう。[18]

使節一行のトルコ国通過是非をめぐる al-Ghuzz 王侯達の協議の中で、その一人が

〝スルタンは何か策略を企てて、こいつら（使節一行）を al-Khazar のもとに差向けて、彼らと一諸になつてわれわれに対して軍事行動をおこそうとしているためとしか考えられない（f°. 202b)。〟

と語つて、その通過を固く拒否した。つまりバグダード・カリフの介入によつて、ブルガール、al-Ghuzz, al-Khazar三国の間の力関係が破れるのを危惧したからに他ならない。

当時の al-Ghuzz は、未だイスラーム教を信奉せず、彼ら固有の宗教と倫理観をもちつづけていた。彼ら日常の問題は、長老会議によつて決定されるほかに、あらゆるものを超越した天なる唯一神（Bir Tengri）を信仰していた。彼らの死者埋葬方法について、Ibn Faḍlān の記しているところを要約すると、次のようにみえている。

まず家（al-bait）に似た型の穴を堀り、死者には寛衣、腰帯をつけ、また手には弓や酒の入つている盃を持たせて、墓の中に座らせた後、粘土でつくつた円蓋（al-qubbat）のような屋根をふく。次に死者が所有していた馬すべてを犠牲に捧げる。その際、馬の頭、足と尾だけは、取りのぞいて木につるし、「これは、彼（死者）が天国に乗つていく馬だ。」と言う。また死者が嘗て（敵）人を殺したことがあるとか勇者であつたならば、彼らは、その人の殺した人数だけの木製の像を彫刻して、墓前に供える。そして次のように言う。「これは天国で彼に仕える奴隷達である。」と。この生贄を捧げずにおくと、彼ら一番の長老――明らかにシャマンと思われる――が現われて、馬の犠牲を勧告する。[19]

その他、Ibn Faḍlān は al-Ghuzz の習慣について触れ、al-Ghuzz とイスラーム商人との間の商業協定――al-Ghuzz 地域を通過するイスラーム商人達は彼らと ṣadīq の関係（親類関係）を結んで、運搬用のラクダやその他の商業資金を借りた（f° 200b）――や彼らの結婚契約の法（f° 200a）についても言及している。[20]

ペチェネーグ族 al-Bajanāk は、九世紀の後半に al-Ghuzz と al-Khazar の圧迫によつて、ヴォルガ河以西の地域に移動したが、一方、Ibn Faḍlān が〝水流のない海に似た水辺に野営していた（f° 202b）〟と記している Bajanāk は、その残留部族のことと思われる。al-Ghuzz の中には、一万頭の馬と十万匹の羊を所有する程の富裕な者がいたのに反して、当時の彼らは、停滞的、貧困な生活を送つていたのは、そのためであろう。[21]

使節一行は、al-Bajanāk の地には、わずか一日の滞在で、さらに北方へと旅をつづけ、Jikh (Yaik), Jākhā (Tchagan), Arkhiz (Irgiz) などのウラル支流の河川を渡つて、バシュキール al-Bāshghird の領内に入つた。Iṣṭakhrī (Ibn Ḥawqal) は、al-Bāshghird をその居住する地域の違いによつて、㈠ al-Ghuzz 国の外れに住む、㈡ al-Rūm（ビザンチン帝国）に隣接した al-Bajanāk の辺境に住むの二つのグループに分類しているが、[22] Ibn Faḍlān が目撃した al-Bāshghird は、明らかにその前者に該当すると思われる。使節一行が Yughandī (Tchagan) 河を渡る際に、

〝キャラバン隊の渡河に先きだつて、武器をもつた兵士の一団が渡らなければならない。なぜならば、その兵隊達は、キャラバン隊が渡つている際に突然に襲撃を加える al-Bāshghird（族）の恐怖に対する先鋒となるからである（f° 202b）。〟

と記されていることは、当時の al-Bāshghird の一団は南接の al-Bajanāk を侵掠して、Tchagan 河の附近まで、その勢力を拡大していたことを示している。[23]

㈢　ヴォルガ・ブルガール国

ヒジュラ暦三一〇年 Muḥarram 月の十二日（九二二年五月十二日）に、使節一行は、ヴォルガ・ブルガール王のところに到着した。実に al-Jurjāniyat を出て以来、七〇日間を要する旅であつた。ブルガール王は、一行の来訪を知つて、その長途の旅の労を犒おうと、王の兄弟や臣下の四王侯達を差向け、彼自身もこれを出迎えた。彼は、カリフに書簡で請願した如く、バグダート・カリフの政治・経済的な援助に大きな期待をよせて、その使節の到着を待望していたのであろう。

ブルガール国に関する記載は「Risālat」全体のほぼ三分の一以上に相当し、十世紀初頃に於けるヴォルガ・ブルガール史研究の上で、欠かすことの出来ない史料を提供していることは言うまでもない。その内容は、ブルガール国の政治、

経済、社会及び自然[24]についてのみならず、その北方に隣接して住んでいた Wisū (Wepsos), Ya'jūj Ma'jūj——恐らくスカンジナビア半島や白海沿岸の漁猟民——についても言及されている。

ブルガール国に到着して四日目、国内の王侯や高位高官達の参集するのを待つて、カリフの書簡が朗読され、品物の贈呈や宴会など使節一行との交流が続けられた。しかし、カリフによつて約束された四千ディナールを持参しなかつたという理由で、王の不信をかい、そのために Ibn Faḍlān が一度は彼らのムアッジンに訂正させたイカーマ Iqāmat——シャーフィー Shāfi'ī 派に基いて、そのフォーミュラを一回に限る——は、王の命令によつて、再び従来のハナフィー Ḥanafī 派方式にもどされる事件がおこつた。当時の彼らが中央アジア諸国やサーマン朝のそれと同じく Ḥanafī 派方式の Iqāmat を採用していたことは、ブルガールへのイスラーム教の伝播径路やその他の文化交流関係を考える上で一助となる。つまり al-Khazar 勢力の存在によつて南進することを妨げられていた彼らの通商・文化的活動は、必然的に al-Khwārazm、サーマン朝、その他の東方諸国に向けられていたのである。従つて、サーマン朝のエミール Naṣr b. Aḥmad や Khwārazm-shāh が使節一行に対して見せたトルコ入国阻止の態度は、バグダード・カリフとブルガールとの直接交渉によつて、従来からの彼らの立場がくずれるのを恐れたからに他ならないと考えることが出来る。

王との数日間に渡る口論の末、結局、王は四千ディナールについて断念するにいたつた。王は、小国ブルガールの立場、バグダード・カリフとの以後の関係を配慮の上であろう。

東南は、al-Ghuzz, al-Bāshghird, al-Bajanāk などのトルコ系遊牧国家と、南は al-Burṭās, al-Khazar、そして北は al-Rūs などと言つた先住諸部族に囲まれて、ヴォルガ・カマ両河の河間地帯に、極めて微弱な勢力を確立しつつあつた当時のブルガール国は、Ibn Faḍlān の目にどのように映じたであろうか。

ブルガール人を率いて国家の王位にあつたのは、バグダードに書簡を送つて、カリフの政治・経済的な援助を要請した

Almish b. Yaltwār 王であつた。しかし当時のブルガール国は、彼の独裁による専制国家ではなく、いくつかの小集団——これを一概にクランと呼ぶことが適当かは明らかでないが、王侯達は各々政治的自治権と経済的独立、宗教の自由を享受していたものと思われる——からなる複合国家であつた。[25]

〝（ブルガール）王は、Khaljat という水場（の陣）を引払つて、Jawshiz という河（畔）に向い、そこ（Jawshiz）に二カ月の間滞在した。その後、王は、さらに進軍を欲して、Suwāz と呼ばれる部族（qawm）のもとに使いを差向けて、王と合同で出発（陣）するようにと命じた。しかし彼らは、それを拒否した。（その問題で）彼ら（Suwāz の人）は、二つの党派（firqat）に分裂した。（その一つは）ブルガール王の婿——その名を Wayragh と言い、その党を統率していた——の率いる党である。その後、再び王は、彼らに使者を派遣して、次のように言つた。

「まことに、いと高き、偉大なるアッラーは、ありがたきことに、イスラーム教（の信仰）と敬虔の君主の帝国と関係をもつという恩恵をお与えくだされた。私は、アッラーの下僕である。一方、この（Suwāz の）者達は、すでに私に全権を任せている。従つて、私に抵抗する者には、剣をもつて懲らしめてやる。」

もう一つの党は、Askal 王という名で知られた部族王の率いるものである。Askal は、ブルガール王の従属下にあつたとはいえ、未だイスラーム教を受けいれてはいなかつた。王がこの伝達を彼らのところに送るや、早速、彼らは王の謀略を危惧してか、挙つて王とともに Jawshiz 河に向けて出発した（f° 208b）。〟

恐らく、この文は、ブルガール王を中心として、ブルガール国家が統一されていつた過程を示したものと考えられる。しかも使節一行がブルガール国に到着したとき、王は Khaljat なる河畔にキャンプしていたのであるから、[26] この国家統一は、使節一行がブルガール滞在中におこつたことに相違ない。もしそれが事実としたならば、ブルガール王によるカリフへの援助要請と彼の国家統一の時期とがほぼ一致していたことになる。彼がブルガール国内にイスラーム教を弘布し、

カリフの政治・経済的援助を求めた裏面には、以上のような国内事情が深く関連していたと見るべきであろう。かくの如く、ブルガール国家の発展は、バグダード・カリフとの提携と支援とによって成就されていつたのである。そして使節一行の来訪後、三・四十年経過したブルガールは、al-Masʿūdī, Iṣṭakhrī, Ibn Ḥawqal らが述べているように、Bulghār と Suwāz (Suwār) という二大都市をもつた統一国家として成長をみたのである。[27]

ヴォルガ・カマの河間地帯に移動する以前、すなわちアゾフ海北部のブルガール故地に居た頃の彼らが農耕民であつたか、遊牧・牧畜の民であつたかは明らかではないが、十世紀の二十年代に於ける彼らの生活形態について、Ibn Faḍlān は次のように述べている。

〝彼ら（ブルガール人）の主要食物は、小麦や大麦も多いが、（概して）あわ（al-jāwars）と馬肉である。耕作する人は誰れでも、それを自らのために収穫し、王は、その件については（収穫物を取る）何ら権限をもつていない。ただし、毎年彼らは一戸あて、黒貂の毛皮一枚を王に納めることになつている（f° 206b）。〟

〝彼らは、みなテント住いである。ただ王のテントは特別に大きく、一千人もしくはそれ以上の人を収容出来、アルメニア製のカーペットが敷きつめてある。またテントの中央には、ルーム製の dībāj の覆付き玉座がある（f° 207a）。〟

この両記事を見ても明らかなように、当時の彼らは、かなり農耕的な傾向を見せていたとは言え、収穫した農作物に対して、全く納税義務が課せられていなかつたことは、未だ農業面での比重がそれ程に重視されていなかつたのであつて、伝統的にテントの中で生活する遊牧的な生活者ではなかつたかと推測される。先きに述べた Khaljat, Suwāz あるいはヴォルガ河畔の市場（f° 208b）は、一時的なキャンプ地か地域名であつて、決して恒久的な都市名を指したものではない。また十世紀初頃のイスラーム地理学者達は、ブルガールという名称を国名あるいは部族名としてかなり曖昧に用いて

いる。以上のことを考え併せるならば、当時の彼らは定まつた王都や町、村を所有せず、従つて農耕・定住的な生活形態をとつていなかつたことになる。しかし、ほぼ同時代の人 Ibn Rustah は、その著「al-'A'lāq al-Nafīsat」の中で、このブルガールについて、

〝ブルガール人の中で Itil（ヴォルガ）河畔にすむ人々は、それぞれいろいろな商品、例えば黒貂の毛皮や白貂皮を交換している。また彼らは農業民であつて、あらゆる種類の穀物――小麦、大麦、ライ麦――を収穫している。〟[28]

と述べている。これは、ヴォルガ河の近くにすむ一部のブルガール人達は、すでに本格的な農業定住へと移行していたことを示したものであろう。

一方、商業貿易は盛んに行われ、北方の寒冷地帯の特産物である黒貂、白貂その他の毛皮類、また男女奴隷などは、ヴォルガ河畔に設けられた一時的な市場で取引されていた。[29] 商業取引を通じて得られた利潤は、ブルガール国の重要な国家収入となつており、次の記事に見られるように、ブルガール王自らがこれに直接関与していたのである。

〝船が al-Khazar 国を出て、al-Ṣaqālibat 国に着くと、（ブルガール）王（自ら）がその船に乗りこんできて、船内に積載している物を算定して、その（船荷）全体の十分の一を（税として）徴収するのである。al-Rūs やその他の部衆達（ghair-hum min sā'ir al-'ajnās）が奴隷を携えてきた場合には、王は（それら奴隷）十人につき一人を選び取る権利をもつている（f° 209b）。〟

以上のように、ブルガール人の遊牧・商業的な生活から農耕・定住、そして都市の発生への移行時期は、前述したブルガール王 Almish によるところの国家統一とほぼ時を同じくし、また丁度その頃にバグダードの使節一行が到来したのである。ブルガール国家の発展を論ずる場合、これら各問題を切りはなしては考えられないであろう。

㈣　al-Rūs（al-Rūsīyat）

十世紀に於けるルース人 al-Rūs によるカスピ海方面への進出は、めざましく、彼らの掠奪の範囲は、Ṭabaristān, Daylam, Jurjān などの沿岸地帯にまで及んだ。[30] ヴォルガ河口の近くに本拠をもつていた旧勢力 al-Khazar でさえ、九一三年から九二一年にかけての彼らの侵入を撃退することが出来なかつた。[31] このように彼らは東欧の内陸河川を通じてカスピ海、黒海とバルト海との間を縦横に航行していたのである。ブルガール国のヴォルガ河畔には、al-Rūs の交易居留地が次々と設置され、そこは彼らの船舶が頻繁に訪れる港や市場となつていた。Ibn Faḍlān がたまたま見掛けた qurtaq も khafṭān も着ず、ただ外套で体半分覆い、片腕を晒けだし、手には斧、剣とナイフを持つていた人々は、まさしく彼ら al-Rūs 人であつた。

Ibn Faḍlān は、ヴォルガ河畔の居留地にすむ al-Rūs 人の商業活動、祭祀および死者に対して行う葬儀の模様を克明に記している。それら記録中には、彼らの持つ神観念や他界観念が示されており、エスノ・ヒストリー的な史料価値を含んでいると思われる。

ヴォルガ河畔の al-Rūs 人居留地について、

〝彼らは本国より渡来して、その船を Itil なる大河（の岸辺）に繋ぐ。また彼らは、その河岸に木造の大家屋を建て、各家の中には十乃至二十人、あるいは、それ内外の（人達）が集まり、一人一人が座るための席が備えてある（f° 210a）。〟

とある。つまりこのような居留地を拠点にして、ブルガール人やその他の国の商人達と商業取引を行つていたのである。また彼らは、商業取引が有利に展開するようにと偶像をまつつた霊廟を設けていた。

〝彼らの船がその港に着くと、早速彼らは各自パン、肉、玉ねぎ、乳とナビーズ酒を持つて降り、やがて土中に打込まれた長い棒杭（khashabat）のあるところに赴く。その棒杭には、人間のような顔がついていて、さらにその杭の

周囲にはいくつかの小像（ṣuwar ṣighār）がある。それら像のうしろに（も）土中に立てられた（数本の）長い棒杭がある。彼らは各自その（一番）大きな像の前に進みでて、平伏し、「おおわが神よ。私は、しかじかの女奴隷とこれこれの黒貂の毛皮を持つて、遠方の国からまいりました。」と言つて、持つてきた全商品を数えあげるのである。次いで「ときに、私は、あなた様にこの贈物をもつてまいりました。」と言つて、その棒杭の前に持つてきたものを置く。そして「つきましては、どうぞ沢山のディナールとディルハム貨幣をもつた商人を私にお差向け下さい。そして（相手商人が）私から私の望み通りの（数量）ものを買い、私の言い値（との食いちがい）でいざこざがおこりませぬようにお願いします。」と言つて立去るのである（f° 210b）。〃

さらに続く文中には、商売が順調にいかず、その為に滞在期間が長びくと、再び贈物を霊廟の像に持つていき、商売の好転を祈願し、商売がうまく成立したときには数頭の羊と牛を殺して、その肉を献納し、頭部は、棒杭にぶらさげておく云々とある（f° 210b）。Ibn Faḍlān が報じているこの記録は、北方に見られた無言貿易（鬼市貿易）の一形態と非常に類似しているが、これは明らかに al-Rūs 人が商売繁昌を祈願した祭祀の一種と考えられる。al-Rūs 人は、ブルガールとは頻繁な交流があつたのであるから、両国人の間の商業取引が相変らず原始的な無言貿易によつていたとは思えない。十二世紀にブルガールの地を訪れた al-Andalus の人 Abū Ḥāmid は、Wisū の北部に住んでいた Yūra 族の行う無言貿易について記しているが[32]、それは Ibn Faḍlān の報告とかなり一致している。Ibn Faḍlān は、ブルガール滞在中にこうした北方の無言貿易に関する情報も同時に得たに相違ない。恐らく、彼がヴォルガ河畔で目撃したことと北方の無言貿易の知識とが混じて一つとなつたのではないだろうか。

(五)　al-Khazar

al-Khazar についての Ibn Faḍlān の記載は、Mashhad 写本にしてわずか五行半にすぎず、al-Rūs 王に関する説明

の途中で、急にハザル可汗（Khazar-Khāqān）の話がはじまる。しかも写本の大部分は磨滅し、判読が困難であるために、Yāqūt による引用文（al-Khazar, II. 438～9）に基いて復元する以外にはない。Ibn Faḍlān は、al-Khazar 国に於ける使節の通過については全く言及せず、またその記載の内容にも不明確な点が多いことを考えあわせると、al-Khazar の知識は、Ibn Faḍlān がブルガールに滞在しているときに通訳か別の情報者を通じて間接的に得られたものであろう。

al-Khazar 王について説明して、

〃その名（称号）Khāqān なる al-Khazar 王について言えば、彼は（一般の人々からは）近より難く、四カ月に一度しか姿を見せない。一般に彼のことを大汗（Kāqān al-Kabīr）と呼んでいる。また、その摂政を Kāqān-beh と言っている。軍隊の統率指揮、国事の立案およびその施行、征服事業や軍事行動は、彼の役目である（f° 212b）。〃

とあつて、シャーマン的な役割を果していたと思われる名目上の王 Khāqān al-Kabīr と軍事や政務などの国家実務の執行権をもつた Khāqān-beh との二王制であつたことを記している。

その他、王の日常の習慣、王都――Itil 河の両岸にまたがつた大都市で、片岸にはイスラーム教徒が、その対岸には王居とユダヤ教徒達が居住――について、al-Khazar 国内に於けるイスラーム教弘布の状況などの簡単な説明がなされている。しかしこれら記載の内容が甚だ al-Rūs 国のそれと似かよつている点に留意すべきであろう。とくに、

〃al-Rūs 王は、副王（khalīfat）をもつている。その副王は軍隊を統率して、敵を攻撃したり、或いは部民（ra'ayyat）に対して王に代行する(f° 212b)。〃

とあるように、al-Rūs の場合に対応して al-Khazar の二王制が語られ、その他にも王の日常の習慣――同臥のための奴隷女と妾が王の周囲に居ること、王の乗馬について、王が死亡したときの埋葬方式――に関する記載、死体の虫害・穢汚を防ぐために al-Rūs 人は死体を焼却するのに反して、al-Khazar は墓の下に河流を通じること、両国の人は

共通して墓を天国と呼んでいる等々、いずれも al-Rūs の政治制度、風俗、習慣に関連して、その比較・対照の意味で、al-Khazar の記載が付加された観が強いのである。

5

十世紀から十一世紀にかけてのアラル・カスピ海の周辺地域は、丁度中国の長城付近のように北方の遊牧民と南方農耕民との間に葛藤現象が見られた。とくに南方のサーマン朝に対する al-Ghuzz の侵入、al-Bajanāk, al-Bāshghird の西進、さらに北方からの al-Rūs 勢力の南下など、これら地域は非常に複雑な様相を呈していた。Ibn Faḍlān の「Risālat」は、バグダードの使節一行がこうした状況下の諸地域を通過の途中、直接遭遇し経験した事実を平明な文章で忠実に伝えた報告書である。それ故に「Risālat」の全般的な真実性については疑うべきもなく、当時の東方イスラーム諸国やその周辺の遊牧トルコ族の動向に強い関心をもつていたバグダードの知識人達やサーマン朝の高官達がこの書に非常な興味を示したのも当然なことと考えられる。「Risālat」が後の多くの地理学者達によつて直接・間接的に引用されるところとなり、やがてはイスラーム教徒達が抱いた北方の地理的知識の一つの源泉となつたのは、その為であろう。イスラーム地理学の上で、「Risālat」がもつている最大の価値は、実はそこにあると考えている。

註

（1）Cf. I. Hrbek, "Bulghār", *EI.* (New ed.)
。al-Bulghār: Ibn Faḍlān, Iṣṭakhrī, Ibn Ḥawqal, al-Muqaddasī.
。Bulkār (al-Bulkār): Ibn Rustah, Ḥudūd al-ʿĀlam.

（2）とくに V. Minorsky は、この必要性を強く指摘している。Cf. V Minorsky, The Khazars and the Turks in the Ākām al-Marjān. *BSOAS* (London, 1937), IX 141.

（3）Yāqūt は、その地理辞典「Muʿjam al-Buldān」の中で、

Ibn Faḍlān の旅行記を指して、"Risālat" (ed. Wüstenfeld, I. 723, 834, II. 436, 486, 834)、もしくは、ただ "Kitāb" (I. 112) と呼んでいる。

(4) P. Kahle, Zum Mashhad Handschrift. *ZDMG* (1934) LXXXVIII, 43～45.

(5) 現存の写本は、Ibn Faḍlān 旅行記の完本ではなく、その抜萃本と思われる。Aḥmad Ṭūsī や Amīn Rāzī による引用文の一部が現存のものと合致しないのはその為である。Yāqūt が利用した版本は、現存のものと同一本であると考えられる。両本に見られる差異の部分は、むしろ Yāqūt 自身による改編・増補であろう。また Qazwīnī は、Yāqūt の地理辞典を介して、「Risālat」を知ったのであろう。なお、A. П. Ковалевский は、「Risālat」出版後まもない頃に、Bukharā のサーマン朝ワジールによって行われた省略本の中の一つが現在に残る写本であって、Yāqūt の時代には数種の版本が流布していたと解説している (A. П. Ковалевский, Книга Ахмеда Ибн-Фадлана о его путешествии на Волгу в 921～922гг, 46.)。

(6) Qazwīnī, Āthār al-Bilād (Beyrouth, 1956), "Bilād al-Rūs (586)", "Bāshghirt (609～10)", "Khwārazm (526)", "Siqlāb (615)".

(7) M. Frähn 以外の研究については C. Brockelmann, *GAL.*, I. 227, Supp. I. 406, III 1207 参照。

(8) 日本では、梅田良忠氏が前掲の A. П. Ковалевский の書からの重訳を一部 (Baghdād～Jurjānīyat) 試みた (「イブン・ファドラーンの復命書」人文論究十ノ一)。また佐藤圭四郎氏は、「Risālat」の中の遊牧民の生活形態に関連した箇所を摘出翻訳された (「イブン・ファドラーンの旅行記に見える遊牧民族の記事について」内陸アジア史論集所収。)

(9) Sāmī al-Daḥḥān, Risālat Ibn Faḍlān (Damas, 1956). S. al-Daḥḥān は、前述した諸学者の研究を参考にして、詳しい序文と脚註を付し、さらに不鮮明な箇所の多い写本にかなり大胆と思える彼自身の補足を試みているが、その一部は承服しかねる。

(10) f° 205a, 209b.

(11) I. Hrbek, "Bulghār" 1305.

(12) al-Mas'ūdī は、al-Rūs 人の al-Khazar 国掠奪について詳しく記している。彼によると、ヒジュラ暦三百年 (912～13) 以後、毎船百人乗りの al-Rūs 船五百艘が al-Khazar 国に侵入した (al-Mas'ūdī, Murūj al-Dhahab. Trad. C. Pellat, Tome I, 165～166)。Cf. D. M. Dunlop, The History of the Jewish Khazars (Princeton, 1954), 209～212.

(13) V. Togan, Ibn Faḍlān's Reisebericht., XX, XXV. A. П. Ковалевскйи Книга., 46.

(14) 「Risālat」の中では、Ibn Faḍlān があたかも使節の代

表者の如くに記されているが、厳密に言うと、彼の使節の中での地位は、不明な点が多い。恐らく Sūsan の下で使節一行を統率し、時には、Khaṭīb として、あるいは、Mu'allim としての役目をも担っていたのであろう。

（15）al-Bulghār 国に齎らす資金は、カリフの命令によって、Khwārazm 地方にある Arthakhusmithān の土地代でまかなわれることになっていた。

（16）Kāna aḥaqqa bi iqāmati al-da'wati li-amīri al-mu'minīn fī dhālika al-baladi lau wajada maḥīṣan. この部分の意味不明瞭。maḥīṣ は、一般に〝逃避〟〝隠れ場〟〝避難所〟の意（Qur'ān IV, 120.）であるが、こゝでは〝有益なること〟〝役立つことの〟意と思われる（Daḥḥān, 81, note 2. M. Canard, 59.）。

（17）ブルガール国と同じく、al-Ghuzz 国もまた al-Khazar の侵掠を受けた（al-Mas'ūdī, Murūj, I. 165）。

（18）Atrak の婿（ṣihr）Almish b. Shilkī（f° 202b）。

（19）f° 199b～200a, 201b.

（20）ibid., 200a～201a.

（21）ibid., 203a.

（22）Ibn Ḥawqal, Ṣūrat al-Arḍ. Ed. J. H. Kramers II. 396.

（23）その他、Ibn Faḍlān は、Bāshghird 族について、彼らの陽物信仰、十二神（冬、夏、雨、風、樹木、人、馬、水、夜、昼、死者、大地）や蛇、魚、鶏などのトーテム崇拝についても言及している。十二神は、おそらく彼らの十二部族との関連が考えられるが、その他については、ほかのトルコ族の間にも類似の例を見ない。

（24）Ibn Faḍlān は、北方の特異な自然現象や寒帯性動植物について述べている。例えば、極光、昼夜の長短、Khalanj（ヒース樹）の密林など。

（25）「われわれは、彼ら（の国内）で、男女五千人からなる血縁集団（ahl bait）を見た。彼らは、すべてイスラーム教に帰依しており、一般には al-Baranjār と呼ばれている（f° 207b）。

（26）「（ブルガール）王のもとに到着したとき、われわれは、Khaljat と言う水辺にキャンプ中の彼を見出した。（f° 207b～208a）」

（27）al-Mas'ūdī, Murūj, I. 164. Ibn Ḥawqal, II. 396.

（28）Ibn Rustah, al-'A'lāq al-Nafīsat (*BGA*, V.), 141.

（29）「その河畔（ヴォルガ河）そいには、数日毎にひらかれる市場があって、そこでは高価な商品が多量に取引されている（f° 208a.）。」

（30）al-Mas'ūdī, I. 165～166.

（31）ibid., I. 165.

（32）Abū Ḥāmid, Tuḥfat al-albāb. Ed. & trad. C. F. Dubler (Madrid, 1953), 15.